



小岩四中だより
自主 品位 明朗 友愛

ひとすじの光

教育目標

明るく、心身ともに健やかで
ひとりだちのできる心豊かな人間になろう

令和8年度 臨時号2

令和8年6月 1日 発行

江戸川区立小岩第四中学校長 村松 弘一

※6月は、「ふれあい(いじめ防止強化)月間」です。

その「いじり」、本当に笑えますか？

～「笑い」と「いじめ」の境界線を見つめ直す～

校長 村松 弘一

いじめは特別な出来事ではなく、ある日ふとした「笑い方のズレ」から始まります。友達との何気ないからかいやツッコミが、教室のあちこちで交わされています。失敗したことも「今日のネタ」に変え合える関係は、仲間がいる心強さの証です。

一方で、その笑いのどこかに、誰か一人だけが置き去りにされてしまう瞬間はないでしょうか。そこにこそ、子供の笑いに潜むいじめの芽があります。

いじめは、どの学校でも、どの子供にも起こり得る問題です。「うちの学校に限って」「この子たちに限って」とは決して言えません。だからこそ、日常の中にひそむ小さなサインに目を向ける姿勢を、学校全体で共有していくことが欠かせません。

本年度、本校では、現在いじめは認知されていません。これは偶然ではなく、あいさつや仲間づくりを大切に「攻めの生活指導」を、学校経営の柱の一つとして続けてきた結果であり、**子供たちの力強さの証です。**生徒どうしが支え合う場面も多く見られますが、数値上の「いじめゼロ」に安住することなく、子供の笑いに潜むいじめの芽を見逃さない視点を、今後も学校全体で徹底していきます。

「いじり」と「いじめ」のちがいは、子供にとっても大人にとっても分かりにくい問いです。同じ言葉でも、「おもしろかったな」と笑って終われる時もあれば、「今はちょっと嫌だったな」と心に引っかかる時もあります。同じ一言でも、「思い出して笑える言葉」と、その場で嫌だと感じる言葉は、子供の心の中でまったく別のものとして積み重なっていきます。

本校では、いじめの未然防止を生徒指導・生活指導の中心に据え、「**いじめが生まれにくい空気をつくる**」ことを**学校全体の目標**としています。そのうえで、次の七つのポイントに目を向けて、「そのいじりは本当に笑えるのか」を生徒とともに確かめていきます。

境界線チェック・7つのポイント

①全員で笑えているか？

いじりは、**その場にいる全員が笑って終われる**ことが条件です。一部だけが笑い、いじられている本人は引きつった笑顔だったり、無理に合わせて笑っていたりする場面は、もういじりではありません。いじっている本人だけでなく、周りで一緒になって笑っている人も、その場を支えるいじめの側に立っています。



②その笑顔、本物か？

いじられた時に、心から楽しくて笑っているのか。それとも、場を壊さないために無理をして笑っているのか。同じ笑顔でも、意味は大きく違います。笑っているふりをしながら「今は嫌だった」と感じているなら、**その時点でその子にとって、それはいじめです。**

③いつも同じ子になっていないか？

その場では笑い合っているように見えても、いつも同じ子だけがいじられていないかが大切です。言われた側がツッコミで返し、自分も同じように相手をいじって笑い合える関係なら、まだ対等と言えます。けれど、「笑われ役」がいつも同じ子に固定されている時、その関係はいじめに変わりつつあります。

④変えられないところをネタにしていないか？

名前や身体の特徴、家族のこと、家庭の事情など。本人の努力では今すぐ変えられない部分を、繰り返しネタにしている場合があります。そのような時は、**どれだけその場で笑いが起きていても、それはいじめです**。「変えられる失敗」はネタにできて、「変えられない素顔」はネタにははいけません。その場限りの小さな失敗をお互い様で笑い合うこととは、意味がまったく異なります。

⑤このあと、行動が変わっていないか？

いじられた後も、その子がさらに明るく輪に入ってきたり、自分から話題を広げたりしていれば、楽しいやりとりとして受け止められています。反対に、口数が減る、視線をそらす、急に静かになる、次の休み時間に教室からいなくなる、保健室やトイレにこもるなど、「逃げる」「隠れる」行動が見られる場合は、**いじめのサイン**です。言葉のあとに続く沈黙や、その場からの不在も、見逃してはならないサインです。

⑥「やめて」で止まるか？

「やめて」と言われた時に、その場の雰囲気はすぐに変わり、いじりが止まるのであれば、関係は修正できます。「ノリが悪い」「冗談が通じない」と言って続けたり、「やめて」と言い出せない空気ができていたりする場合は、すでにいじめの段階に入っています。**本当に冗談であれば、相手の一言で必ず止まるはず**です。

⑦親や先生の前でも言えるか？

二人きりの時にも、同じテンションで、相手を思いやりながら言える言葉であれば、まだいじりの範囲です。周りに人がいる時だけウケを狙って大声で言うのであれば、それは相手をダシにしたいじめです。いじられている子の親や先生が目の前にいても、同じトーンで言えるかどうか、一つの基準になります。「**見られたら困る笑い**」は、**自分でも後ろめたさを知っている笑い**です。

いじめゼロの今こそ、「いじめが生まれにくい空気」をつくる

いじめは、起きてから対応するだけでは防ぎきれず、子供たちを守り切ることはできません。本校では、いじめが認知されていない今こそ最大の未然防止のチャンスだと捉え、日常の笑いや会話の中にある小さな違和感に目を向けることを、生徒指導・生活指導の共通の柱としています。こうした視点を学級経営や学年経営、学校経営の中に組み込み、「いじめをなくす」という目標から一歩進めて、「**いじめが生まれにくい空気をつくる**」ことを学校全体の責務として果たしていきます。

同時に、「いじり」と「いじめ」の境界は、外から見えにくい場面が少なくありません。そこで鍵になるのが、「つらい」「嫌だ」と感じたときに、それを誰かに伝えられる力です。この力を、本校では「**相談できる勇気**」と位置付けています。「嫌だ」と感じたときに、「明日、先生に話してみよう」「おうちの人に聞いてもらおう」と一歩踏み出せるかどうか。その一歩が、子供を守る確かな一歩です。

その一歩を支えるために、担任や学年の先生、生徒指導担当、養護教諭、スクールカウンセラーなど、複数の相談窓口を整えています。保護者の皆様にも、「いつもと様子が違う」「こんな言葉が気になった」といった小さなサインでも、遠慮なく学校にお知らせいただきたいと考えています。

学校と家庭、そして地域が同じ方向を向き、子供たちの「相談できる勇気」と、いじりをいじめに変えない「**攻めの生活指導**」とを両輪として、いじめの未然防止に取り組み続けます。いじめは、**どの学校でも、どの子供にも起こり得ます**。だからこそ、**子供の笑いに潜むいじめの芽を決して見逃さない学校であり続けます**。

